

第7回野菜需給・価格情報委員会における夏秋野菜の需給・価格見通しについての意見の概要

1 日時

平成22年7月8日(木) 14:00~16:00

2 場所

農畜産業振興機構 北館6階 大会議室

3 概要

(1) 春野菜の需給・価格の状況

前回の委員会での需給と価格の見通しと実績

①春キャベツ

ア 見通しでは、入荷量については、愛知を中心に作付面積が増えたので前年を上回るとされた。価格については、前年を下回るとの見通しであったが入荷が大幅減となったことから上回った。

イ 実績は、4月の天候不順で神奈川県を中心に生育が遅れ大幅な入荷減となった。年内の入荷量は前年に比べて約2割の入荷増、全体としては前年を上回った。価格は、入荷が大幅減となったことから前年を大幅に上回った。

②たまねぎ

ア 見通しでは、入荷量については、前年並とされた。価格については、平年並みの出荷量を維持することができるの見通しで、前年を下回ると見込まれていた。

イ 実績は、入荷量は前年比97%と前年をやや下回り、価格は天候不順の影響を受けて入荷の大幅減となったことから高値展開となり、前年比120%と前年を大幅に上回った。

(2) この春の気象と野菜価格について

今年の春は、天候不順から野菜の生育に大きな影響が生じ、4月には野菜価格が高騰した。

今年の春の野菜価格高騰にいて、気象との関係を春野菜のうちキャベツ、たまねぎ、レタスにつきまして検証した。

ア キャベツ

今年は、年明け以降、北極振動（気圧が北極圏で高く中緯度は低い状態）の影響を受け、主産地神奈川では著しい寒波が波状的に到来した。

こうした気象状況から、東京中央卸売市場における神奈川県のカベツの入荷は、寒波の波状的な襲来のため生育が遅れ、4月は出荷が出遅れたため、全体の入荷量が前年と比べ大幅に減少した。その後、連休以降神奈川県の出荷が回復し、また千葉

県の出荷が増え、5月上旬には全体としての入荷量が大幅に増加した。

このような入荷状況の結果、東京市場の卸売価格については4月は主産地である神奈川県の出荷の遅れから価格が前年を上回って推移したが、連休以降神奈川県の出荷が回復し、千葉県の出荷増を受け、価格も低下した。

イ だいこん

主産地の千葉県における気象状況はさきほどの神奈川県同様に北極振動の影響を受け著しい寒波が波状的に到来した。

こうした気象状況から、千葉県葉県のだいこんの入荷についても、低温の影響から生育が遅れたが、出荷遅れの影響がキャベツほど激変ということではない。

4月は出荷がやや遅れ、その後の生育回復により入荷量が増加した。

こうした入荷状況から、卸売価格は、4月は主産地千葉県の出荷の遅れから価格が前年と比べ高値となり、千葉県の出荷回復に伴い価格も低下した。

ウ レタス

茨城県のレタスについても生育が遅れ、4月は出荷が遅れたため、全体の入荷量が昨年と比べ大幅に減少した。その後、長野県がやや出荷が遅れたものの、茨城県の生育回復により入荷量が増加し、5月上旬には全体としての入荷量が増加した。

こうした入荷状況から、卸売価格については、4月は主産地茨城県の出荷の遅れから品薄状態となり価格が前年と比べ高値となったが、茨城県の出荷回復に伴い価格も低下した。

(3) 野菜需給協議会幹事会の報告

今年は2月以降の全国的な日照不足に加え、激しい気温の変動などにより春野菜の生育に大きな影響が生じ、4月には野菜価格が高騰した。

このため、農林水産省・全農・当機構が連携し、以下の対策を講じた。

農畜産業振興機構においては、4月16日に野菜需給協議会幹事会を開催し、野菜の需給状況・今後の見通しを示すとともに、消費者団体等関係者から価格・需給について意見を聴取する他、主な野菜の主要市場の卸売数量と価格のグラフを毎日HPに公表を開始し、更に、春野菜の生育状況現地調査を実施しその報告書をホームページに公表した。

農林水産省においては、4月16開催の幹事会での意見も踏まえ、同日、全農に対して野菜の供給確保に向けて出荷の前倒し・規格外品の出荷促進要請を行った。

全農においては、農林水産省からの出荷促進要請を受け、生産出荷団体緊急調整

事業を活用したキャベツ等の早取りによる出荷前倒しが行われた。

(4) 夏秋野菜の需給・価格見通し

ア 夏秋キャベツ

(ア) 生産者側の報告

- ・ 作付面積は長野が若干増えましたが、増えたのはグリーンボールで普通のキャベツは前年並みであった。
- ・ 生育状況は春先の天候不順で各地、生育が遅れ気味。特に関東の高冷地においてやや生育が遅れたが回復してきています。北海道では天候不順で生育が遅れた。
- ・ 出荷見通しは主産県で前年比 104%、3年平均比 103%となった。
- ・ 長野については、特に 9 月が前年を大きく上回る見込み。ホクレンは前年を上回るが平年は下回る見込み。

(イ) 委員の意見

- ・ 昨年は入荷量が例年を下回った。
- ・ 昨年は 7 月に北海道の大雨があり、群馬産が京浜市場に集中した。8～9 月は高めで推移し、長野、群馬が後ずれになった影響で 10 月は下落した。
- ・ 本年は生育が遅れ気味でしたが、回復傾向で価格は下押しの予想。

(ウ) 委員の意見を踏まえた上での夏秋キャベツの需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告内容は、

- ・ 作付面積は、微増。
- ・ 生育状況は、3～4月の天候不順の影響でやや遅れたが回復傾向。
- ・ 今後、気象が平年並みに推移すれば、前年を上回る可能性が高い。
- ・ 価格は、前年より低めで推移する可能性が高い。

イ たまねぎ

(ア) 生産者側の報告

- ・ 作付面積はホクレンで前年比 101 パーセント、佐賀で 104、兵庫で 96、トータルで見ますと、ほぼ前年並みの 100 パーセント。
- ・ 佐賀は機械化が非常に進んでいる。特に 5 月中旬以降に出荷する作柄は作付面積が増えた。
- ・ 兵庫は昨年来の高値にも関わらず、高齢化が非常に進んでいることから面積は減少した。
- ・ ホクレンはほぼ前年並み、トータルで見るとほぼ前年並みの作付面積。
- ・ 生育状況は佐賀県、兵庫県は 11 月の天候不順で定植遅れ。

年明けの低温日照不足で生育遅れ。6月以降の天候の回復により回復基調。
平年並みからやや小玉傾向。

- ・ ホクレンは、融雪の遅れ、天候不順により、定植作業が遅れ。生育は1週間から10日程度遅れた。
- ・ 今後の出荷見通しはトータルで前年比117%。7、8月は不作の前年を大きく上回る数字、平年比も上回る見込み。佐賀、兵庫が中心となる。
- ・ 9月以降の出荷は北海道は生育が遅れ気味だが、不作であった前年、平年と比べても出荷量は上回る見込み。

(イ) 委員の意見

- ・ 8月のお盆明けから早生ものの出荷が始まり、9、10月は平年並みの見通しです。現況、佐賀産、淡路産のものが出ています。小玉傾向で、2L以上の大玉の収量の比率が低く価格に影響した。
- ・ 7月の天候でかなり、生育にはかなり大きな影響が出ますが、生育が遅れているなかで回復傾向。たまねぎの収穫前の1ヶ月位が一番肥大する重要な時期なので、7月の天候が今後の中では大きく影響する。

(ウ) 委員の意見を踏まえた上でのたまねぎの需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告内容は、

- ・ 作付面積は、全国的には前年並。
- ・ 生育状況は、北海道で1週間から10日ほど天候不順により遅れ気味であるが回復傾向にある。
- ・ 府県産は小玉傾向にあるものの、全国的に見れば平年並みの出荷が見込まれる。
- ・ 価格は、平年並と見込まれる。

ウ 夏だいこん

(ア) 生産者側の報告

- ・ 作付面積は千葉県は概ね前年並。全農神奈川では、秋冬だいこんから春キャベツへの移行が見られ減少傾向。
- ・ 生育状況は特に千葉県は10月～11月の長雨で播種が遅れて1旬後ずれしており、年明け以降も天候不順で生育は良くないが回復基調。長崎県についても回復した。
- ・ 出荷見通しは4月以降もこのままの天候が続けばほぼ平年並みに見込み。

(イ) 委員の意見

- ・ 品質は生育期間の低温により抽苔が見られ低下している。

- ・ 加工用だいこんは契約比率を上げ市場外流通が増えている。
- ・ ここ何年か見ても、品質が年々落ちて来ている。20～30年前までは関東の高原産のだいこんが主流だったが、産地が北へ移動していった影響ではないか。
- ・ だいこんの辛味が強い。特に夏場のだいこんが非常に辛くなっている。暑くなると辛味が強まる傾向がある。

(ウ) 委員の意見を踏まえた上での夏だいこんの需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告内容は、

- ・ 作付面積は、北海道を中心に微増。
- ・ 生育状況は、北海道で低温や降雨により、播種が遅れ平年より遅れているが、回復傾向。
- ・ 今後、気象が平年並に推移すれば、不作であった前年を上回る出荷が見込まれる。
- ・ 価格は、出荷増により前年を下回ることが見込まれる。
- ・ 連作障害による品質低下が生じていることに留意する必要がある。

エ 秋にんじん

(ア) 生産者側の報告

- ・ 豊作だった昨年に比べれば少ないが、平年並みの数量となった。
- ・ 千葉県産の冬にんじんに残量があり 3 月下旬から出荷の過剰が懸念されたがやや豊作傾向。

(イ) 委員の意見

- ・ 雨が適度に降って地温あれば、肥大も良好に進む。2 L の発生率が増えてくると厳しい販売環境になる。市場では、M 中心の出荷を推進し価格の維持をしている。昨年よりも入荷が多くなる見込みで例年になく厳しい環境。
- ・ 8 月いっぱいまでは堅調な販売推移。8 月下旬から 9 月以降は量的に、北海道を主力に出荷される。面積、出荷量等を見る限り、若干増えると予測している。
- ・ 価格は 9 月以降については昨年よりは若干下回る見込み。
- ・ ここ 1、2 年で加工型の大きな農家が増えている。機械化が進み、契約も加工向けという農家が増えて来ている。

(ウ) 委員の意見を踏まえた上での秋にんじんの需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告内容は、

- ・ 作付面積は、前年並。

- ・ 生育状況は、中心となる北海道で、低温や降雨により、平年より5～10日程度遅れているが、回復が見込まれる。
- ・ 今後、気象が平年並に推移すれば、お盆明け以降、出荷量が増える可能性がある。
- ・ 価格は、7月～8月中旬ごろまでは、堅調に推移するものと見込まれるが、お盆明け以降、特に9月に入り、厳しい状況となることが見込まれる。
- ・ 需要面では、加工用の需要が増加することが見込まれる。

オ 夏はくさい

(ア) 生産者側の報告

- ・ 作付面積は、漬物加工需要が大半となる盛夏期については減少傾向。
- ・ 生育状況は、3～4月の天候不順により、長野県、群馬県で遅れが見られたが回復傾向。

(イ) 委員の意見

- ・ この時期は、市場に入る6～7割が加工業務用向けとなり業務加工の動向による価格の影響が大きい。
- ・ 今年はやや生育遅れがあったが回復傾向にある。ゲリラ豪雨などでの天候条件で市況は一変する可能性があるが、基本的には価格は去年より下押し。
- ・ 夏場の白菜は漬物需要。漬物加工業者の契約率は非常に高く、市場に出てくる量は非常に少ない。
- ・ 漬物の売れ行きは、スーパーの数字で前年比90%程度。特に白菜漬けの減少は顕著。中央市場の数字をみても前年比87%と落ち込んでいる。漬物全体は前年比97%。逆にキムチの出荷量は130%と増加。

(ウ) 委員の意見を踏まえた上での夏はくさいの需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告内容は、

- ・ 夏はくさいの需要のほとんどがつけもの加工用であり、つけもの需要が減少する中で、作付面積は、減少傾向にあるものの、生育状況の遅れが回復していることもあいまって、出荷量は前年並、特に9月には平年並みにまで回復することが見込まれる。
- ・ 価格は、高くても前年並みであり、前年を下回ることも見込まれる。
- ・ 今後は、加工用・業務用の需要に対応した需給バランスの確保（計画生産）がより一層重要となる。

カ 夏秋レタス

(ア) 生産者側の報告

- ・ 作付面積はレタス全体で 103%と若干増えたが、結球レタスについては全農長野で前年並みからやや増となった。
- ・ 出荷見通しは 7 から 8 月については全県的に天候不順で出荷量が減少した前年を上回り、平年並みと見込み。
- ・ 10 月以降は前年を下回りますが平年並みの見込み。

(イ) 委員の意見

- ・ 天候の影響を一番うけやすい品目。8 月、9 月は長野の高冷地が中心になる。長野の天候次第で価格が大きく変化する。
- ・ 本年は 7 月まで出荷が前進しているため、8 月は高めで推移する見込み。9 月は昨年ほどではないが下落が予測される。

(ウ) 委員の意見を踏まえた上での夏秋レタスの需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告内容は、

- ・ 作付面積は、前年並。
- ・ 生育状況は、遅れていた長野県が回復し、順調。
今後、気象が平年並に推移すれば、出荷量は回復し前年を上回り、平年並みの出荷が見込まれます。
- ・ 価格は、8 月は前年を下回るものの、9 月以降は前年を上回る可能性がある。